

浄土寺庭園の調査

調査は国の名勝に指定されている庭園の復原整備事業に先立ち現状の記録のために実測を行ったものである。庭園の面積は約860m²、で、1/40で野帳に記録、延べ13日を要した。成果品として1/50、1/100、1/200の等高線・単点入りの平面図を作成した。

浄土寺の概要 浄土寺は真言宗泉涌寺派の大本山で、中国地方屈指の古刹といわれる。寺伝では聖徳太子の創建と称し、平安時代には後白河院の勅願所となった。鎌倉時代には伽藍の再興が行われたが、わずか20年で全焼してしまい、翌1325年当地の富豪道蓮、道性夫妻によって再建され今日の寺觀の基礎が築かれた。寺は瑠璃峯の南山腹で、尾道水道を見渡す高台に位置し、境内には東から多宝塔（国宝・1327年再建）、阿弥陀堂（重文・1345年再建）、本堂（国宝・1326年再建）、庫裏および客殿（1719年）が並び、本堂の南に山門（重文・1328年）、本堂の北西に方丈（重文・1692年）が配されている。なお、建造物をはじめ仏像や曼荼羅など多数の指定文化財を有する。

庭園の概要 庭園は方丈の西、客殿の北に位置し、北西部の傾斜地を利用した築山泉水庭で、築山の奥には茶室露滴庵（重文）とその露地があり飛び石づたいに方丈の縁と結ばれている。また、客殿の茶席の北面は露地、方丈の西面は平らな砂庭とし、傾斜地の裾に池がつくられ、今は涸れた流れを受けている。

寺には作庭時の絵図が伝わっており、作庭者等が明らかである。作庭者の詳細は不明であるが阿波徳島の隠士、雪舟十三代目の孫（画系の意）長谷川千柳である。文化3年正月に作庭を終え、絵図を描いているので、作庭時期はこの少し前ということになる。築山を五天竺、池を無熱池と称し、主要な石には本尊、月光、弥勒、羅漢など仏名を付しているため作庭意図は仏教的な世界觀を現わそうとしたものと考えられる。作庭の約10年後、庭園西端に茶室露滴庵が移築された。露滴庵は伏見城の遺構と伝えられるが、向島（尾道対岸の島）の天満屋（富島家）から文化11年に移築したとするのが唯一の記録である。宗家敷内流燕庵写しの茶室で、三畳台目の席に水屋と後補の勝手二室からなる。本席と勝手は約35度振れて接続し、さらに渡り廊下が勝手と客殿を接続している。勝手が増築されるのは明治後期との推測もあるが、露滴庵移築で庭園の一部が改造された以外、作庭時の形態をよく留めていると言えよう。

今後の課題 傾斜地の景石には周辺土壤が流出し20cmも浮き上がっているものも見られることから、30cm程度削平されている部分もある。絵図に見られる傾斜地の流れの上半部が現在は痕跡すら残していないのはこのためであろう。景石の据え直しや地形の復原が必要である。また、現在の池は南岸から庭園の東南隅を経て暗渠で排水しているが、絵図には傾斜地の裾を西へ向かう流れが見られ、その位置などの確認が必要である。

（内田和伸／平城調査部）

図1 浄土寺庭園絵図

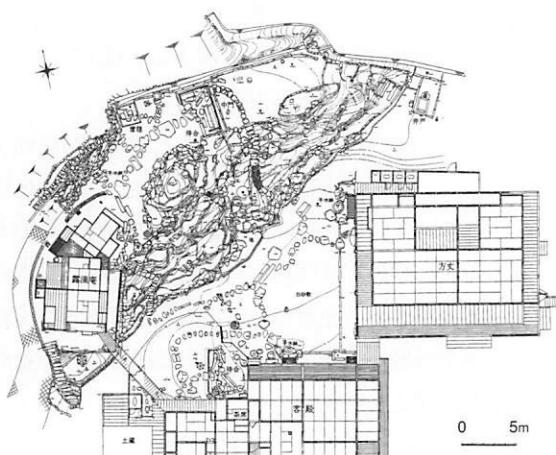


図2 浄土寺庭園平面図